

学会・シンポジウム報告

第16回 国際家畜繁殖学会(ICAR)参加報告

川島 千帆

帯広畜産大学 畜産フィールド科学センター

2008年7月13日から17日までハンガリー共和国の首都、ブダペストにあるBUDAPEST CONGRESS & WORLD TRADE CENTERで第16回国際家畜繁殖学会が開催された(写真1)。ICARは1948年に始まり、4年に1度開催されている。今回の学会のポスター発表は約600題、参加者数は1000人以上で、本学からは私を含めて5名が参加した。



写真1 学会会場 (BUDAPEST CONGRESS & WORLD TRADE CENTER)。

学会の内容は、あらゆる動物の繁殖に関わる全てのことで、Bovine Reproduction・Reproduction of Small Ruminants・Reproduction of Buffalo and Exotic Bovidae・Reproduction of Camelidae・Equine Reproduction・Porcine Reproduction・Reproduction of Pet Carnivores・Reproduction of Zoo and Wild Mammals・Reproduction of Rabbit and Laboratory Rodents・Avian Reproduction・Reproduction of Other Vertebrates (Fishes, Amphibians, Reptiles)・Neuroendocrine Control of Reproduction・Molecular Biology of Reproduction・Ovary and Uterus・Pregnancy, Parturition, New-born Offspring・Andrology, Male Genitals・Artificial Insemination and Related Techniques・Oocyte and Embryo (including nuclear transfer)・Biomedical Models in Reproductive and Regenerative Medicine・Gene Modified Animals (transgenics)・New Methods in Care of Reproduction・

Stress, Diseased State and Reproduction・Conservation of Biodiversity・Toxicology of Reproduction・Developments in Sustainable Animal Production and Reproduction・Trends in Research, Care and Teaching of Reproduction・Trace minerals and reproduction・Otherの28セッションにおいて、ウシ・ウマ・ブタ・ヤギ・ヒツジ・ラクダ・ウサギ・野生動物などに多岐にわたる発表が行われた。分野も多いが、発表者も学生から著名な先生まで偏りもなく様々で、動物の繁殖研究を行っている者のお祭りのように感じられた。広い分野の中でも、やはり大半はウシの繁殖研究者で、私の発表分野でもあったBovine Reproductionはポスター数もそれを見に来る参加者も非常に多く、どの国もウシの繁殖性低下の問題は深刻となっており、各国の飼養管理や方針に応じた研究内容が伺えて非常に興味深かった。今回のポスター会場(写真2)があまり広くないせいもあり、会場はポスターをほとんど見ることが出来ないほどの人集りで、会場の入り口通路付近が掲示場所であった私は、体の大きな外国人の流れの波に飲まれてしまい、自分のポスターの前になかなか戻れない辛い1時間半を過ごした。しかし、窮屈な会場でも各所で活発な討論がされており、ウシの繁殖分野の重要性を改めて感じた。

また、招待講演者によるPlenary Session (12題)、Symposium Session (48題)、Workshop (66題)はどれも勉強になるものばかりであった。特にPlenary



写真2 ポスター会場。Webb先生に説明しています。

Session のLucy先生の代謝を軸にした分娩前後の乳牛の栄養・繁殖に関する発表や、Symposium Session のSartin先生の毒素や免疫の代謝・繁殖機能への影響、Zvi Roth先生のヒートストレスの卵胞・卵子への影響に関する発表は、現在の私の研究の位置づけの確認、今後の研究展開を考える上で、非常に参考になった。本学会では前日に半日のブダペストツアー、学会期間の夜にGet-together PartyやGala dinner、学会後にホルトバージ国立公園のツアーなどの様々なイベントが用意されていた。乗り物酔いのひどい私は、船上での夕食に自信がなかったため、Gala dinner以外のイベントに参加した。半日のブダペストツアーでは、王宮やブダペストを縦断しているドナウ川に架けられた西のブダ地区と東のペスト地区を結ぶくさり橋（写真3）の戦争にまつわる話を聞きながらバスで市内を観光した。ドナウ川のにおいと川沿いの建物を見ると私の故郷・小樽を思い出し、初めての地なのに懐かしい気持ちになった。また、ホルトバージ国立公園ツアーでは、国で保護している固有種のウシ・ウマ・ブタ・ヒツジなどを近くで見ることができた。写真4に示したハンガリー灰色牛は肉用種で、その肉は脂肪分が少なく食べやすく、おいしかった（写真5）。とても温厚なウシで、オスのみで放牧させてもケンカをせず、動きもゆっくりであった。放牧地には牧柵がなく、落ち着いたあるリーダー格のウシ数頭にカウベルをつけるだけでそこに留まるそうだ（写真6）。またホースショーもあり、2頭の馬の背中に立ち乗りしたり、地面に横たわせたり、犬のようにお座りさせたり、様々な伝統技術を披露してくれた（写真7）。しかし残念なことに、現在の馬は原種ではなく、戦争時に軍用として、その後は乗馬に適するように足を長く改良されてしまっているそうだ。また国の政策として、チーズ生産用に水牛（もちろん固有種ではない）を増やす計画が進んでおり、国立公園の近隣のいくつかの農家で飼育も始まっているそうで、ハンガリー産水牛チーズがスーパーで売られる日も遠くないそうだ。このツアーの昼

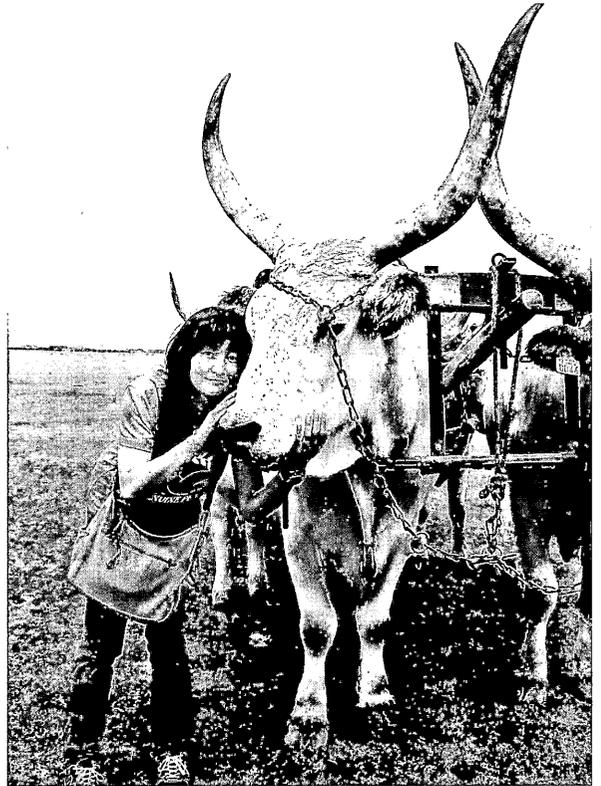


写真4 ハンガリー灰色牛. 非常におとなしい。



写真5 ハンガリー灰色牛のステーキ. 写真4とは別の牛。

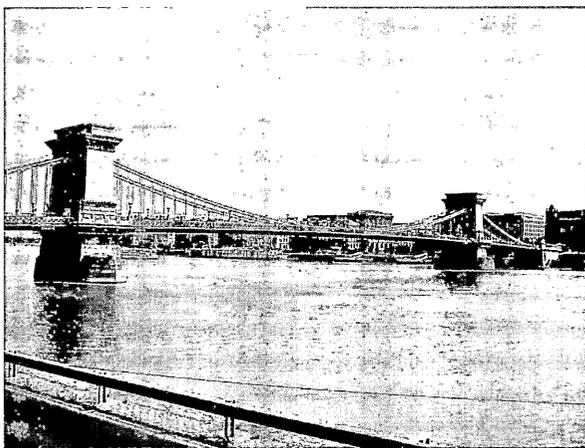


写真3 くさり橋. ドナウ川より手前がブダ地区、向こう側がペスト地区



写真6 ハンガリー灰色牛の放牧風景. どの牛もあまり活発に動かない. 左の牛はカウベルを付けている。



写真7. 犬座姿勢のホースショーの馬.

食では、ウシの繁殖研究者がよく引用している卵胞波の概念図を示したフロリダ大学のThatcher先生とその奥様、お義母様と一緒にテーブルになった。Thatcher先生は今回の学会の会長を務められており、繁殖研究者にとっては「世界のThatcher」と言っても過言でなくらい偉大な先生である。Thatcher先生とは今まで何度かお会いしたことがあるが、その偉大な立場とは裏腹に非常に気さくな先生である。レストランでハンガリー音楽の生演奏があり、その楽器に興味を引かれて見ていると、「一緒に写真を撮ってあげるよ」と言ってくださった。偉大な先生に対し申し訳ないと思ったが、Thatcher先生はすでに私のカメラを持ち構えてい



写真8. Thatcher先生に撮って頂いた写真。手前はピアノの弦だけのよう楽器である。日本人には何故か「荒城の月」を演奏してくれる。

たため、せっかくなので撮ってもらった。それが写真8である。Thatcher先生のように偉大な先生の多くは、その数多くの業績に伴う年月を経験されているものである。さらに慣れない私のカメラを使ったせいもあり、多少ぶれてしまっているが、今回の1番の写真になった。

今回、ICARに初めて参加したが、研究に関しても、人との交流に関しても勉強になるものが多く、良い経験になった。次の開催は2012年カナダのバンクーバーである。次回もぜひ参加し、各国の研究者とさらに議論出来るように、それまで研究に励みたいと思う。

